

四月九日投票の北海道知事選は、自民、公明の与党が推薦する現職の鈴木直道氏の圧勝に終わった。有効投票数に占める得票率は七五%を上回り、過去最高を更新。世論調査の高い支持から、いつしか呼ばれるようになった「八割の男」はその本領を發揮し、二期目に向けて順風満帆のスタートを切ったように見える。

ただ、鈴木氏の戦い方は「横綱相撲」とはほど遠い。告示前の候補予定者の公開討論会に出席せず、立憲民主など主要野党が支援した新人の池田真紀氏らと丁々発止のやりとりをする場面は選挙期間中もなかった。また、報道各社の政策アンケートに対しても、選択式の設問はほとんど選択肢を選ばず、「その他」として無難な言葉を並べるだけだった。

街頭演説では、次世代半導体の国産化を目指す新会社 Rapids（ラピダス、東京）の千歳市進出を一期目の実績として繰り返し強調。だが、この進出に道は「もともとあまりかかわっていなかった」（道庁関係者）という。ふるさと納税についても「私が知事に就任して三年連続で個人版、企業版、ともに全国一位は北海道になった」と言及したが、ふるさと納税の増加は市町村の努力のおかげ。自身の実績として挙げ

罪深い道知事選

るのは無理があるだろう。

街頭演説の際には写真撮影の時間を設け、鈴木氏の前には有権者の列ができた。政策を訴えるより、イメージを売り込むことで支持をつなぎとめたという印象だ。一方で、応援を受けた自民党道議からは「上からも言うような演説」「候補者の名前をほとんど言わず、手柄話ばかり」などの不満も聞かれる。

こうした「守り」の姿勢は、投票票当日も続いた。午後八時に当選確実が出た後も、共同インタビューや二〇三社を除く各社の個々の中継やインタビューに応じることなく、早々と選挙事務所を後にした。イメージを守って自らの都合のいいことだけを語り、政治姿勢や政策面で突っ込まれることを嫌う。圧勝はその戦略の成果なのかもしれないが、候補の実像を知ることができず、道民にとっては不幸な選挙戦だったのではないか。

対する池田氏を支援した立憲などの戦略もお粗末だった。擁立は告示が約一カ月半後に迫る二月上旬にずれ込んだのに加え、立憲道連の逢坂誠二代表は池田氏の「最後の訴え」にも参加しなかった。池田氏を応援した他の野党の道内幹部からは「立憲はまじめにやる気があるのか」との声さえ聞

かれた。

確かに、圧倒的な人気を誇る現職相手の戦いは厳しいが、選挙は今回だけのものではない。まして道知事選は、今回の統一地方選では全国でも珍しい与野党の全面対決型の選挙。衆院選や参院選などで与党にどう対峙していくのか、北海道の今後の政治状況にも大きな影響を及ぼすだけに、立憲の対応には疑問が残る。旧民主党系の底が抜け、もはや全道での選挙戦を乗り切るだけの体力が失われてしまったのかもしれないが、与野党の切磋琢磨がなければ、道民の民主主義は確実に衰退する。

「安全運転」に徹する与党陣営と「勝負気」を感じさせない野党陣営。これでは選挙ムードや論戦が盛り上がるはずもない。投票率は過去最低を更新し、道民の「道政離れ」が浮き彫りになった。知事選をはじめとする統一地方選前半戦では、道議選で女性当選者が過去最多になるなど明るい材料もあつたものの、北海道の民主主義のこれからに危機感が募る選挙戦だった。

それでも、選挙こそが民主主義の要であることは間違いない。その大事な仕組みをどう生かしていくのか。政党や候補はもちろん、私たち一人一人もその意味を考え直さなければならぬ。

ハ転V